大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬　莱　む　し　の　会
第 31 号　2026.10.14

2026 年 飼育網室内オオムラサキの羽化状況と今後の課題

大原のオオムラサキを守る会

1. はじめに

2013 年の飼育網室でのオオムラサキ累代飼育の成功以来、羽化数の類推を、死亡個体（一部放蝶個体）を数えることで行ってきた。

2026 年も同様の方法で行ったが、これからの累代飼育に向けて、いくつかの特記すべき結果が得られたので報告する。

2. 2016 年からの羽化数の推移

2026 年の類推羽化総数は 213 頭であった。これはこれまでの羽化数に比べて決して多い数ではない。とりわけ 2022 年 2 月に網の目を細かくして天敵の侵入を阻止できるようになってからは、累代飼育が途絶えた 2020 年と 2021 年を除くと、2022 年に次ぐ少なさであった（**図 1**）。羽化数は当然幼虫数に相関する。したがって、2026 年の飼育幼虫数が少なかったということに他ならない。

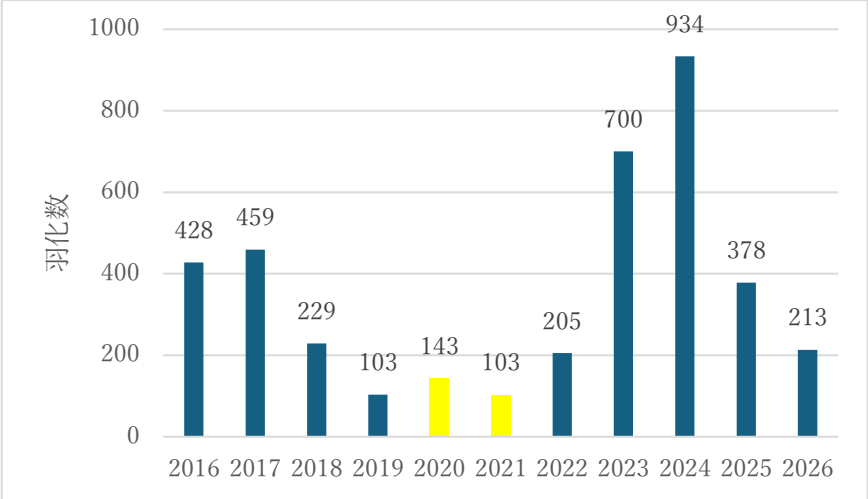


図 1　2016 年からの羽化数の推移（黄色は累代飼育不成立年）

近年は 6 月下旬に行うオオムラサキ観察会・放蝶会で放蝶する数を 50 前後としているので、残った個体で次の世代を生み出せるかを危惧したが、これは杞憂に終わった（後述）。

3. 2016 年からの性比の推移

2016 年から 2024 年までは、性比（オスの数/メスの数×100）はおよそ 100（雌雄同数）で推移してきた[1)]。しかし 2025 年は 302.1 とオスはメスの 3 倍以上となり、これは異常な数値と言わざるを得ず、その原因をいくつか挙げてみた[2)]。有難いことに、2026 年は 101.9 とほぼ雌雄同数に戻った（**図 2**）。2025 年はなにがしかの異常が発生し、2026 年はその異常が解消されたといえるのかもしれない。

4. 成虫の生存率の推移（2025 年との比較）

表 1 は 2026 年の死亡もしくは放蝶の記録である。この年の網室内成虫初見日は 6 月 10 日なので、その 8 日後に死亡個体を初めて 1 頭発見したということになる。

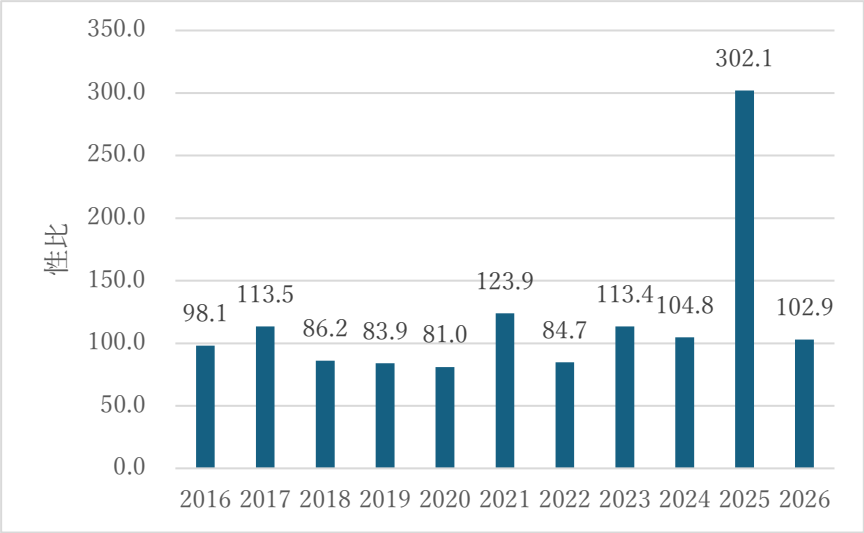


図 2　2016 年からの性比の推移

図 3 に 2025 年と 2026 年の推定生存率の推移を示した。これは何かと成虫について異常を感じた 2025 年と 2026 年を対比するためのものである。作図にあたっては次のような集計上の処理を行った。

・2025 年の成虫初見日は 6 月 9 日であり、2026 年は 6 月 10 日と近似していたので、作図開始日を 6 月 9 日とした。

・2026 年は 7 月 29 日に多くの個体を網室外に放したので、両年ともこの日を作図の最終日とした。

表 1　2026 年の成虫死亡乃至放蝶の記録

月日	確認数	♂	♀	備考	累計	確認者名
6月18日	1	1	0	羽化不全	1	藤野
6月19日	2	2	0		3	小松
6月20日	48	48	0	放蝶会　48	51	小松
6月24日	2	2	0	羽化不全　1	53	小松
7月1日	12	9	3	卵初見	65	藤野
7月4日	4	2	2	交尾初見	69	藤野
7月8日	8	4	4	1齢初見	77	藤野
7月12日	1	0	1		78	小松
7月15日	6	4	2	2齢初見	84	小松
7月16日	6	3	3		90	藤野
7月18日	2	2	0		92	藤野
7月19日	0	0	0		92	藤野
7月21日	2	2	0		94	的場
7月24日	9	6	3		103	小松
7月25日	5	1	4		108	藤野
7月28日	3	2	1		111	小松
7月29日	48	10	38	死亡　4(♂3、♀1)　放蝶　44(♂7、♀37)	159	小松
7月31日	6	2	4		165	藤野
8月2日	8	4	4		173	藤野
	3	0	3		176	小松
8月5日	33	2	31	死亡　3(♂1、♀2)　放蝶　30(♂1、♀29)	209	小松
8月8日	2	1	1		211	塩尻
8月15日	1	0	1		212	小松
9月2日	1	1	0	除草時に発見	213	小松
計	213	108	105			

・各年の羽化総数は378と213であるが、この数を飼育し続けたわけではなく、2025年は6月21日の放蝶会で49頭を放し、2026年は48頭を放した。したがって、両年の生存率算出の母数を329、165とした。

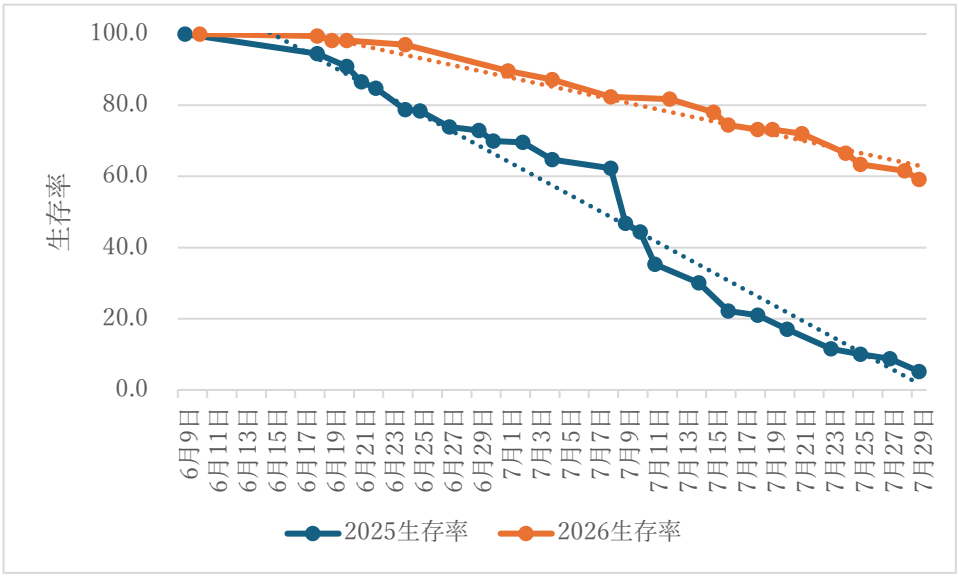


図3　2025年と2026年の生存率の推移（各グラフの点線は近似直線）

図3を見ると、両年の生存率の推移の違いは歴然としている。近似直線の勾配が大きく異なり、2025年は7月29日には生存率が5.2%とほとんどが死亡していたのに対して、2026年は59.1%と6割近くが生き残っていた。これはこの期間を通して、2025年は羽化した成虫は脆弱で次々と死んでいき、2026年の成虫は生命力が旺盛であったことがうかがえる。

このような結果になった原因は何であろうか。これは2025年の性比が302.1と異常にオスが多かったことと関係があるのかもしれない。2025年の報告の中で、異常にオスが多くなった原因として、①隣接する梅園での薬剤散布の影響、②隔離した飼育による遺伝子的劣化、③網室内食樹の葉の成分的劣化（日射量の不足が考えられる）の可能性の3つを挙げている。しかし2026年は②と③については、2025年と状況の変化がなかったので、今のところ①が原因ではないかと推察している。生存率の差異についても、2026年は①の影響が少なかったと推察できる。

5. 今後の課題

2025年の成虫が脆弱であったことは、その年の産卵数や幼虫数に大きく影響を与えていた。毎年、秋が深まると幼虫は越冬のために食樹から樹下へ移動して落ち葉の中に潜り込む。冬季にその数を調べるが、2025年は2644頭であり、この数は2023年の20785頭や2024年の19612頭に比べると極めて少なく、わずか13%程度でしかない。一方で2026年9月4日現在、まだ幼虫のほとんどは3齢として樹上にいるが、その食痕の多さから類推すると、2026年の越冬幼虫数は2023年や2024年と同等もしくはそれ以上かもしれない。

以上から、2025年の羽化状況は少なくとも近年では異常であったと考えられる。その原因は今のところ農薬散布の影響が大きいと推測した。梅園ではウメの実の収穫までに、梅園の管理者は害虫防除のために毎年数回の薬剤散布を行っているが、2025年がとりわけ頻度が高かったとは聞いていない。そして散布時には風向きを考慮して、飼育網室に飛散する可能性が高い北からの風のときは行わないようにしていると聞いている。しかし風向きは常に安定しているわけではないので、年によっては影響は免れない。我々もこれまでこ

の影響を避ける対策として主に 2 つのことを行ってきた。一つは梅園から 100m ほど離れた場所へ第 2 網室を設置したことであった。しかしこの場所は日当たりが悪いので網室内のエノキの成長は思わしくなく、ここで全世代を飼育するに至っていない。二つ目は越冬幼虫を網袋に入れて、網室外のエノキに吊るすことであった。この方法は薬剤散布の影響を避ける目的だけでなく、より多くの成虫を得るためのものであった。網室内だけでは目的にかなう数を飼育することができないのである。

今後も散布時の風向きの影響の多少はあろうが、梅園での薬剤散布の影響は避けられないと考えられる。その対策として、薬剤の影響が及ばない飼育方法が必須であろう。そのために 2 つの方法を採ってきたが、第 2 網室の活用は上空を覆うエノキの大木や南側にあるオニグルミを伐採・剪定しなければならず、ある程度はできても十分な光量を確保するのは現実的に難しい。第 3 網室の設置も考慮すべきだが、会員の高齢化が進む中では難しい。

現在のところ、唯一の有効な手段は野外エノキでの飼育である。この方法はオオムラサキの保護活動開始当時から採用している方法で、網袋に 5, 6 頭の幼虫を入れて枝に取り付ける。これはエサ不足にならないように目を離せず手間がかかる方法であるが、羽化率は比較的良好である。この方法の欠点は手間がかかるので、飼育頭数に限界があることである。それを解消する方法として、より大きな袋をエノキ全体、あるいは大枝にかける方法があり数年前からはじめたが、残念ながら現在のところ、蛹や成虫の回収率はよくない。これは今のところ、もっとも省力化できる飼育方法と思われるので、回収率を上げる対策を講じる必要がある。

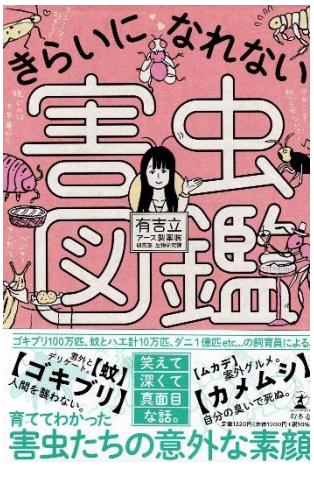
6. 引用文献

1）大原のオオムラサキを守る会：羽化したオオムラサキは雌雄の数に違いがあるか. 大原の里と比良の山 7､4. 2024

2）大原のオオムラサキを守る会：2025 年の飼育網室内オオムラサキの羽化数とその性比について. 大原の里と比良の山 20､4－7. 2025

（文責：藤野適宏、小松清弘）

《図書の紹介》　きらいになれない害虫図鑑



著者の有吉立氏はアース製薬生物研究課の課長さんで､研究員の実験に供するムシたちの飼育の最前線の人である。軽妙でユーモラスな文章は読者を飽きさせることがないが、読み進むとすぐにその力量が半端でないことに気付く。私たちはオオムラサキの累代飼育に四苦八苦しているが、彼女たちは 100 種類に及ぶムシを累代飼育しているのだ（累代飼育が難しい種もあるらしいが）。好きで入った道ではないというが、随所に小さな生き物に対する愛を感じることができる。この仕事に邁進できる秘訣は「虫を嫌がらないことと、あとは責任感」だそうだ。幻冬舎 1200 円＋税

（藤野）

大原とびわ湖バレイのルートセンサス　3 年間の記録

大原のオオムラサキを守る会

ルートセンサスの方法

　ルートセンサスとは調査対象となる場所に固定した調査ルートを設け、定期的に調査対象の生き物の種類・個体数を記録するものです。

大原のルートセンサス

　大原のルートセンサスの特徴は、水田・畑と草原、川に沿った樹林縁です。全体の距離はおよそ 1040m、標高差はほとんどありません。環境タイプなどに応じて、８のセクションに分けられています。2025 年の調査では、４２種・１６９４個体のチョウ、１９種・１６９４個体のトンボを記録しています。



















各セクションの長さと様子

１　長さ　50m　網室周辺の草地とササの群落

２　長さ　70m　川に沿う桜並木の下

３　長さ 190m　川沿いの民家横の旧道

４　長さ 220m　林縁の川に沿った旧道

５　長さ　50m　川の横の畑と草地

６　長さ 250m　川に沿った桜並木と横の草地

７　長さ　30m　草地

８　長さ 180m　水田と畑を通る道

（作成：小松清弘）

大原で見られたチョウ　2023年～2025年

	科名	和名	2023	2024	2025	合計
1		ジャコウアゲハ	1	0	0	1
2		アオスジアゲハ	3	2	2	7
3	アゲハチョウ	アゲハ	3	4	7	14
4		キアゲハ	3	5	1	9
5		クロアゲハ	2	5	4	11
6		オナガアゲハ	1	1	0	2
7		ナガサキアゲハ	1	0	2	3
8		モンキアゲハ	3	0	1	4
9		カラスアゲハ	0	2	5	7
10		ミヤマカラスアゲハ	0	0	2	2
11	セセリチョウ	アオバセセリ	1	0	0	1
12		ダイミョウセセリ	4	8	22	34
13		コチャバネセセリ	0	0	1	1
14		ヒメキマダラセセリ	9	4	11	24
15		キマダラセセリ	1	7	0	8
16		イチモンジセセリ	2	7	1	10
17		クロセセリ	1	2	0	3
18		チャバネセセリ	3	17	12	32
19		オオチャバネセセリ	5	3	4	12
20	シロチョウ	モンキチョウ	18	52	44	114
21		キタキチョウ	56	122	153	331
22		モンシロチョウ	68	222	144	434
23		ツマキチョウ	0	1	4	5
24	シジミチョウ	ウラギンシジミ	9	14	23	46
25		ゴイシシジミ	1	0	0	1
26		ベニシジミ	20	45	43	108
27		キマダラルリツバメ	0	1	0	1
28		ムラサキシジミ	3	8	25	36
29		ウラゴマダラシジミ	1	1	0	2
30		トラフシジミ	0	1	2	3
31		ウラナミシジミ	4	42	4	50
32		ルリシジミ	13	17	16	46
33		ヤマトシジミ	208	550	662	1420
34		ツバメシジミ	6	45	21	72
35	タテハチョウ	ホシミスジ	1	0	0	1
36		コミスジ	2	5	4	11
37		ミスジチョウ	0	1	2	3
38		イチモンジチョウ	0	7	0	7
39		アサマイチモンジ	4	6	4	14
40		ミドリヒョウモン	1	1	2	4
41		オオウラギンスジヒョウモン	0	0	1	1
42		ツマグロヒョウモン	21	20	39	80
43		ウラギンヒョウモン類	2	0	1	3
44		ヒメアカタテハ	0	2	0	2
45		アカタテハ	5	6	7	18
46		キタテハ	26	44	50	120
47		テングチョウ	3	8	11	22
48		アサギマダラ	1	0	10	11
49		クロヒカゲ	1	0	0	1
50		ヒカゲチョウ	7	19	2	28
51		サトキマダラヒカゲ	1	12	11	24
52		ヒメジャノメ	1	2	5	8
53		クロコノマチョウ	4	15	7	26
54		ヒメウラナミジャノメ	105	255	322	682
		個体数合計	635	1591	1694	3920
		種数合計	44	42	42	

大原で見られたトンボ　2023年～2025年

	科名	和名	2023	2024	2025	合計
1		ハグロトンボ	21	31	26	78
2	①	ミヤマカワトンボ	3	0	2	5
3		アサヒナカワトンボ	2	0	2	4
4		ニホンカワトンボ	0	30	24	54
5	②	ホソミオツネントンボ	0	0	3	3
6	③	ギンヤンマ	1	0	2	3
7		ダビドサナエ	0	4	0	4
8	④	コオニヤンマ	3	3	1	7
9		ウチワヤンマ	1	1	6	8
10	⑤	オニヤンマ	0	2	5	7
11	⑥	コヤマトンボ	0	5	1	6
12		ハラビロトンボ	1	0	1	2
13		シオカラトンボ	48	96	64	208
14		オオシオカラトンボ	6	6	13	25
15		シオヤトンボ	2	8	6	16
16	⑦	アキアカネ・ナツアカネ	60	93	252	405
17		マユタテアカネ	1	9	18	28
18		ヒメアカネ	0	19	1	20
19		ノシメトンボ	2	0	2	4
20		チョウトンボ	0	1	0	1
21		ウスバキトンボ	44	104	187	335
		個体数合計	174	381	1694	2249
		種数合計	14	15	19	

科名
① カワトンボ科
② アオイトトンボ科
③ ヤンマ科
④ サナエトンボ科
⑤ オニヤンマ科
⑥ エゾトンボ科
⑦ トンボ科

（作成：小松清弘）

びわ湖バレイのルートセンサス



びわ湖バレイルートセンサスの特徴は、樹林の林内や林縁、スキーゲレンデを歩くルートです。全体の距離はおよそ 3100m、標高差はおよそ２０８ｍであり、環境タイプなどに応じて、10 のセクションに分けられています。2025 年の調査では、38 種・８３７個体のチョウをまた、22 種・5188 個体のトンボを記録しています。

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩



各セクションの長さと様子

1　長さ 280m　雑木林の林内登山道　樹林とアスレチック施設

2　長さ 350m　尾根伝いの登山道　左：雑木林、右：リフト

3　長さ 270m　スキーゲレンデ　草原性

4　長さ 400m　スキーコース　樹林内左：渓流

5　長さ 150m　スキーゲレンデ　草原性左右：雑木林

6　長さ 200m　スキーゲレンデ　草原性右：渓流

7　長さ 300m　雑木林の林内登山道　樹林内尾根横断

8　長さ 550m　雑木林の林内登山道　湿原地　渓流

9　長さ 350m　スキーゲレンデ　草原性　一部湿地

10　長さ 250m　スキーゲレンデ　草原性

（作成：大友正生）

びわ湖バレイで見られたチョウ　2023年～2025年

	科名	和名	2023	2024	2025	合計
1	アゲハチョウ	アオスジアゲハ	0	1	1	2
2		ウスバシロチョウ	34	11	30	75
3		アゲハ	1	0	2	3
4		キアゲハ	3	3	5	11
5		クロアゲハ	1	0	0	1
6		モンキアゲハ	2	0	0	2
7		カラスアゲハ	0	0	3	3
8		ミヤマカラスアゲハ	0	2	1	3
9	セセリチョウ	コチャバネセセリ	2	7	10	19
10		ヒメキマダラセセリ	7	13	12	32
11		イチモンジセセリ	5	43	13	61
12		チャバネセセリ	2	18	7	27
13		オオチャバネセセリ	18	65	116	199
14	シロチョウ	モンキチョウ	55	35	35	125
15		キタキチョウ	3	13	5	21
16		モンシロチョウ	199	238	204	641
17		ヤマトスジグロシロチョウ	1	5	0	6
18	シジミチョウ	ウラギンシジミ	2	1	1	4
19		ベニシジミ	3	8	10	21
20		ムラサキシジミ	0	7	1	8
21		メスアカミドリシジミ	0	1	0	1
22		オオミドリシジミ	0	3	0	3
23		エゾミドリシジミ	0	3	1	4
24		ジョウザンミドリシジミ	0	3	1	4
25		ウラクロシジミ	0	0	1	1
26		トラフシジミ	1	3	3	7
27		ウラナミシジミ	0	7	3	10
28		ルリシジミ	1	0	10	11
29		ヤマトシジミ	8	8	16	32
30		ツバメシジミ	0	1	3	4
31	タテハチョウ	ミスジチョウ	0	0	1	1
32		イチモンジチョウ	1	0	1	2
33		ミドリヒョウモン	26	20	13	59
34		オオウラギンスジヒョウモン	3	3	24	30
35		ツマグロヒョウモン	78	132	69	279
36		ウラギンヒョウモン類	54	183	203	440
37		ヒメアカタテハ	0	3	11	14
38		アカタテハ	3	15	5	23
39		ルリタテハ	1	1	2	4
40		ヒオドシチョウ	5	0	0	5
41		キタテハ	0	2	0	2
42		テングチョウ	12	4	4	20
43		アサギマダラ	13	2	6	21
44		クロヒカゲ	0	1	2	3
45		ジャノメチョウ	1	1	0	2
46		ヤマキマダラヒカゲ	0	0	2	2
47		クロコノマチョウ	0	1	0	1
		個体数合計	545	867	837	2249
		種数合計	30	37	38	

びわ湖バレイで見られたトンボ　2023年～2025年

	科名	和名	2023	2024	2025	合計
1	①	アサヒナカワトンボ	7	17	13	37
2		ニホンカワトンボ	0	0	1	1
3	②	ミルンヤンマ	0	0	1	1
4		ルリボシヤンマ	0	1	1	2
5		オオルリボシヤンマ	0	0	3	3
6		ギンヤンマ	0	0	2	2
7	③	ミヤマサナエ	1	5	2	8
8		ダビドサナエ	0	0	1	1
9		クロサナエ	0	1	14	15
10		ヒメクロサナエ	4	4	0	8
11		ウチワヤンマ	1	1	2	4
12	④	オニヤンマ	15	25	67	107
13	⑤	コヤマトンボ	0	1	1	2
14		タカネトンボ	0	4	1	5
15	⑥	シオカラトンボ	32	56	24	112
16		オオシオカラトンボ	18	16	21	55
17		シオヤトンボ	10	19	31	60
18		ショウジョウトンボ	1	0	0	1
19		ミヤマアカネ	1	0	0	1
20		ヒメアカネ	30	71	93	194
21		ノシメトンボ	1	0	3	4
22		コノシメトンボ	1	0	1	2
23		ネキトンボ	1	1	3	5
24		コシアキトンボ	0	1	0	1
25		ウスバキトンボ	45	101	178	324
26		アカネ類	1587	4600	4725	10912
		個体数合計	1755	4924	5188	11867
		種数合計	16	17	22	

科名
① カワトンボ科
② ヤンマ科
③ サナエトンボ科
④ オニヤンマ科
⑤ エゾトンボ科
⑥ トンボ科

（作成：大友正生）

特別展示「大原とびわ湖バレイの昆虫」　および
ワークショップ「科学遊びと昆虫標本づくり」
来場者アンケートの結果と考察

アンケート担当　村上　豊

2025 年春、当会は大原文化センターにて 20 周年記念展示「昆虫から見た大原の自然」を催行した。その際、来場者の方々からアンケートに回答をお願いし、そのまとめを本誌第 15 号にて公開した。今年度も文化センターの一角を借り、表題の特別展示をおこなったが、本年は開催時期を子どもたちの来場を見込んで夏休み期間（7 月 18 日～8 月 2 日）とし、また展示に加えてワークショップの催行を試みた。本稿はこの開催期間に寄せられたアンケートの回答をまとめ、若干の考察を試みたものである。

今回の回答枚数は 31、昨年の回答枚数 117 より著しく少なかった。この減少はそのまま来場者数の少なさを意味している。そうなった理由として、開催時期が酷暑続きであった、あるいは開催日数が少なかったというだけではない可能性が高い。今後に向けて内容の精査はもとより、案内など働きかけの方法など検討していきたい。

問 1・問 2・問 4 については昨年と同じ設問とした。昨年度との比較ができるよう並べて表記したが、母数が大きく違うため充分な考察に至らなかった。

（今年度%）〔昨年度%〕

問 1　あなたのお住まいは次のどれにあてはまりますか。　回答総数 28（90.3%）〔100%〕

- □ 大原地区　8（25.8%）〔19.7%〕
- □ 大原以外の京都府内各地　17（54.8%）〔53.8%〕
- □ 他府県　3（9.7%）〔26.5%〕

昨年に比べて顕著なのは他府県からの来訪者の割合が低かったことである。昨年の開催時期が春の行楽シーズンであったこととの関連が考えられる。

問 2　次のうち、あなたのご来場のきっかけになったのはどれですか。　（今年度%）〔昨年度%〕

回答総数 28（90.3%）〔100%〕

- □ 学校からの案内を見て　5（16.1%）〔4.3%〕
- □ 案内ハガキを見て　13（41.9%）〔19.8%〕
- □ ポスターまたはチラシを見て　0（0%）〔6.0%〕
- □ 人から教えてもらって　7（22.6%）〔44.8%〕
- □ そのほか　3（9.7%）〔23.3%〕

昨年最多だった「人から教えてもらって」との回答は減少した。会期のはじめに訪ねてこられた方の印象が重要だと思われ、今回の「出足の鈍さ」がさらなる残念な結果を生んでしまったと考えた。展示内容をいかに印象づけるか、またいかにしてスタートダッシュをかけるかを考えたい。「案内ハガキを見て」という回答は昨年同様に多かった。今後も案内ハガキの枚数は充分に確保すべきであろう。次回に案内する宛先は、今年の来場者だけから選ぶのでは少なすぎて失敗するだろう。いつも案内をもらえるイベントとして定着させリピーターを増やす必要を感じる。

問 3 ご覧になった特別展示のうち、興味をお持ちになった分野は次のどれですか（複数回答可）。

	回答総数 31（100%）
□ ルートセンサスとは	4 （12.9%）
□ 大原のチョウとトンボ	14 （45.2%）
□ びわ湖バレイのチョウとトンボ	9 （29.0%）
□ チョウによる大原とびわ湖バレイの環境の比較	5 （16.1%）
□ トンボによる大原とびわ湖バレイの環境の比較	3 （9.7%）
□ 大原とびわ湖バレイの昆虫標本	15 （48.4%）
□ 大原とびわ湖バレイの昆虫目録	2 （6.5%）

やはり実物標本のもつインパクトは大きいようだ。今後も大原を考える材料として、昆虫に着目してもらえると良いと思う。

問 4 あなたは、昆虫について次のどれに関心がありますか（複数回答可）。

	（今年度%）〔昨年度%〕 回答総数 31（100%）〔100%〕
□ 昆虫の観察や鑑賞	16（51.6%）〔45.3%〕
□ 昆虫の調査・環境の調査	12（38.7%）〔39.3%〕
□ 希少な昆虫の保護活動	12（38.7%）〔47.9%〕
□ 昆虫など自然の生き物の写真撮影	11（35.5%）〔36.8%〕
□ 昆虫など自然の生き物をモチーフにした（アクセサリー等の）制作	1（3.2%）〔6.0%〕
□ 昆虫採集や標本の作製	5（16.1%）〔20.5%〕
□ 人の生活での昆虫の利用（昆虫食なども）	5（16.1%）〔13.7%〕
□ 植物の栽培および農業における昆虫の駆除	1（3.2%）〔13.7%〕
□ そのほか	1（3.2%）〔5.1%〕

自由回答欄に、「昆虫に関心が無い」と書かれていた 1 名と、問 4 に無回答だった 4 名の計 5 名を除く 26 名のうち、複数の選択肢にチェックされた方が 17 名（全体の 54.8%）あった。訪ねてこられた方の半数以上は昆虫への関心が高いと見て良いだろう。その内訳は、「観察や鑑賞」「調査」「保護活動」「写真撮影」が上位項目となっていて、これらはまさに私たちの活動内容そのものである。中には私たちの日頃の活動に、（展示を見られて）あらためて関心を持って頂けた方もあったかも知れない。

昨年のまとめ記事で、「昆虫を材料にしたワークショップを企画してみても良いかも知れない」と書いた。それを受けて今年は「昆虫標本づくり」というワークショップを開催したところ、予定していた受入人数を満たす希望者が参加したことも、関心の高さを裏付ける事象と考えて良いだろう。

問 5 あなたは、これからの大原の自然環境がどのようであってほしいとお考えですか。
ご意見を自由にお書き下さい。

以下、いただいたご意見から抜粋して列記する。

- 自然ゆたかな大原であってほしい。（多数）
- 気候の変動によって環境が変わってしまうのはやむを得ないが、観光客の増加による環境の変化は困りものである。掲示物や口頭で注意することで守っていきたい。

・オオムラサキを中心にした蝶類の保全活動をすすめることで、里山環境を守り続けてほしい。
・歩いていても、昆虫が減ったと感じている。
・オオムラサキやアサギマダラが飛び交う大原であってほしい。
・なつかしい、チョウやトンボの標本が見られてよかったです。

問 6 以下 8 種類の科学遊びのうち、あなたはどれで遊びましたか。すべて答えて下さい。

回答人数 11 人（100%）

□ フジバカマのにおい袋4 （12.9%）
□ マジックフライヤー（飛べアサギマダラ）5 （16.1%）
□ にょろごま6 （19.4%）
□ 電気クラゲ2 （6.5%）
□ バランストンボ7 （22.6%）
□ 風船ロケット2 （6.5%）
□ スチロール球噴水3 （9.7%）
□ 大原砂鉄ランド1 （3.2%）

問 7 あなたが遊んだ科学遊びのうち、一番楽しかったのはどれでしたか。またその理由も教えて下さい。

この設問に答えてくれた 9 名について、すべてを転記します。
・にょろごま･･･動きが楽しかった。
・にょろごま･･･少しの材料でヘビの動きができることに感動した。
・電気クラゲ･･･なかなかむずかしかった。
・バランストンボ･･･紙がうすっぺらなのに落ちなかったこと。
・フジバカマのにおい袋･･･良いにおいがした。
・マジックフライヤー･･･動きが大きかった。
・にょろごま･･･動きがユニークだった。
・にょろごま
・スチロール球噴水･･･集中して遊べる。

ワークショップとして用意した 8 種類の「科学遊び」、多数の来場で材料が不足してしまってはと 1 回の来場で 2 種類の挑戦と限定したが、その必要は無かった。子どもの来場数は想定したよりも大幅に少なかったのだ。広報に問題があったのか、デジタルゲーム時代の子どもたちへ訴えることはできなかったのかもしれない。卓球を楽しみに文化センターを訪れた中学生いわく、「子どもを呼びたいなら親を呼ばないと」というのが真実かも知れない。

問 8 昆虫標本づくりに参加された方、感想をお聞かせ下さい。

開催初日（7 月 18 日）にチョウの展翅を、最終日前日（8 月 1 日）に展翅外しと甲虫の展足のそれぞれ実習をおこなった。参加者は小学 3 年～5 年の 9 名であった。以下は 9 名による感想。

・むずかしかったけれど、とても楽しかった。
・展足が楽しかった。

・めんどくさいなーと思ったりしたけど、やりがいはあったと思う。
・思った通り簡単だった。次はどんな昆虫にしようかなと思う。外国の虫を標本にしたい。
・めずらしい昆虫を標本に作れて、いい経験になった。おとなになって昆虫採集したいです。
・カブトのメスとカナブンの展足がめんどすぎてイライラした。チョウの標本は楽しかった。
・これから標本づくりをたくさん経験してベテランになりたいと思った。
・意外と簡単だった。
・展足が少しむずかしかった。

各日およそ 2 時間近くに及ぶ実習だったが、参加した小学生たちは集中を切らすこと無く、よくついてきてくれたと思う。夏休みの宿題に応用できるよう、この日程を設定したのだったが、果たしてどうであったか。この実習をきっかけに、昆虫採集を「遊び」から「科学」に深化させてもらえたら良いのだが。

大原　いのちの季（とき）　神無月

アレチヌスビトハギ

道端や草原にピンクのかわいい花が咲いているのをよく見ます（図 1）。秋の七草のハギのようにも見えます。でも近づいて触れたりするとズボンや服に実がいっぱいつきます。厄介な引っ付き虫です。草の名前はアレチヌスビトハギです。

アレチヌスビトハギはマメ科の多年草で北アメリカ原産の帰化植物です。草丈は 50～100 ㎝ほどで葉は 3 枚の小さな葉でできています。花は 9 月から 10 月にかけて咲き、蝶のような形をしています（図　2）。朝に咲いた花は夕方にはしぼんでしまいます。

花が咲いた後には小さな豆のような実をつけます（図　3）。実には 3～5 個の種が入っていて、一つずつがくびれています。実には小さなかぎ状の毛がいっぱいは生えています（図　4）。この毛がちょうど面ファスナーのようになって、服などにしっかりくっつきます。

気付かないうちに人にくっつく様子からヌスビト（盗人）の名前が付いたという説もあります。ほかにも実が泥棒の足跡に似ているからという説もあります。昔の泥棒は足音を立てないように足裏の外側だけを地面につけて歩いたそうで、その時ついた足跡が実の形のようだというのです。この説はあの有名な植物学者の牧野富太郎も述べています。

アレチヌスビトハギは大変繁殖力が強くいたるところで見ることができますが、もともと日本に自生していたヌスビトハギもあります。里山の林の周辺に見られアレチヌスビトハギに比べると草丈も花も小さく目立ちません。違いは実が小さくて２個の種しか入っていません。種のくびれはアレチヌスビトハギよりも深く上の端につきそうに見えます。大原にもあるはずですので機会があったら探してみてください。


図 1　全景


図 2　花


図 3　実の全景


図 4　実

（文　小松清弘　写真　的場亮一）

＜9 月おもな活動の報告＞

◆9 月 2 日（水）　10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
○参加者　小松、藤野、塩尻、的場、大友、村上、奥谷、計７名
○活動内容
（午前）網室
・会議　①本日の活動内容
②セブンイレブン助成金申請－来週分担等について検討する
③頭殻調査－毎週袋内を見る；変化なければそのままにしておく
④フジバカマ－順調に生育、本日薬剤散布する
⑤鉢植えの原種フジバカマ－文化センターに運ぶ
・作業　①頭殻調査　②網室内の防草シートの撤去、餌台の撤去
③網室内外の除草
（午後）文化センター
・作業　①頭殻調査　②文化センター横フジバカマ畑の除草
③シーラカンス原寸大魚拓複製のお披露目

◆9 月 10 日（木）10:10～　（報告者：小松）
○参加者　小松、大友、村上　計　3 名
○活動内容：大原ルートセンサス

◆9 月 12 日（土）10:00～13:20　（報告者：大友）
○参加者　大友、小松、村上　計　3 名
○活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆　9 月 16 日（水）　10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
○参加者　小松、藤野、大友、村上、奥谷、計５名
○活動内容
（午前）網室
・会議　①本日の活動内容　②オオムラサキの二化 3（2♀1♂）、蛹１－今年多い
③鉢植え原種フジバカマ－文化センターに運ぶ
・作業　①頭殻調査　②網室内外、フジバカマ園の除草
（午後）文化センター
・作業　①頭殻調査
・会議　①特別展示およびワークショップ来場者アンケートの結果と考察（別紙参照）
来場者が昨年に比べて少なかった－来年の特別展示について検討する必要
②セブンイレブン助成金 2027 年度の申請（別紙参照）
申請書の追加綱目－団体の活動テーマ、助成申請の活動テーマ
購入物品－何をやるかそのために何が必要か今後検討する
・頭殻調査　・特別展示－写真展
・ワークショップ、標本作成－夏休みに実施

◆９月 23 日（水）　10:00～、13:30～　（報告者：小松）
○参加者　藤野、大友、塩尻、小松　計 4 名
○活動内容
（午前）網室
①ルートセンサス　②頭殻調査
（午後）文化センター
①活緑を網室に運ぶ
②鉢植え原種フジバカマを文化センターで展示（支柱立て、案内板設置、水やり）

運搬用軽トラックを上田さんより借用

○報告・連絡

①里の駅で活緑注文　②セブンイレブン助成金についての討議を次回に開催予定
③網室改修等を依頼した業者との連絡が取れていない　④藤袴と和の花展紹介
⑤桂坂小学校でのアサギマダラのマーキング説明会（藤野さん担当）

【あとがき】

今朝、自宅前の電線にツバメが集結していた。付近を歩くとどの電線にもいてかなりの数である。これから大挙して南の地方に移動するのだろうか。時を同じくして、旅をするチョウとしても知られるアサギマダラも、大原のフジバカマの花に飛来するようになった。南下移動中に、花の匂いに誘われて降下してきたに違いない。フジバカマは芳香を発するが、それは主に葉に含まれるクマリンが主成分である。アサギマダラが誘引されるのは葉から出るこのクマリンではなく、花から発するアルカロイドであるピロリジジンアルカロイドだという。この匂いはヒトには感知できないらしい。

移動に関しても、ツバメと同じようなときに北上・南下するので、アサギマダラも集結して移動すると考える人が多い。事実、フジバカマなどに集団で吸蜜している写真をよく見るので、移動もそうであると考えがちである。しかし、大原のフジバカマ園で朝から観察していると集団でやってくることはなく、1 頭ずつ、ポツリポツリとやってくる。やってきたアサギマダラはヒトが捕獲しない限り、長時間花にぶら下がり、蜜を吸い続ける。そして昼頃には大量のアサギマダラをフジバカマで見出すことになる。

実はアサギマダラが集団で移動するか、単独で移動するかは古くからある議論である。実際稀な例ではあるが、アサギマダラが大挙して飛来して、標識調査をしていた私は捕獲しても捕獲しても標識が追っつかず、疲れはてたということがあった。しかし、と私は考える。ツバメの集団移動は移動のコースを知らない新世代の子供を保護したり導くのに有効であるが、アサギマダラは移動するごとに通常は世代交代するので、移動は常に未知の旅であり、集団移動のメリットはない。逆に捕食者の目につきやすく、襲われる可能性が高くなる。果たして実態はどうなのだろう。（藤野）

＝　目　次　＝

2026 年 飼育網室内オオムラサキの羽化状況と今後の課題 …… 1
《図書の紹介》　きらいになれない害虫図鑑 …… 4
大原とびわ湖バレイのルートセンサス　3 年間の記録 …… 5
特別展示「大原とびわ湖バレイの昆虫」およびワークショップ「科学遊びと昆虫標本づくり」
来場者アンケートの結果と考察 …… 9
大原　いのちの季（とき）　神無月　アレチヌスビトハギ …… 12
9 月おもな活動の報告 …… 13
あとがき・目次 …… 14

発行　大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会　　2026 年 10 月 14 日　　第 31 号
ＨＰ　大原のオオムラサキを守る会 https://ohara-omurasaki.com/

大原のオオムラサキを守る会代表　〒606-0044　京都市左京区上高野仲町 54　小松清弘
蓬莱むしの会代表　〒520-0105　大津市下坂本 1-40-16　大友正生
編集　〒611-0011　宇治市五ケ庄西川原 21-151　藤野適宏